
自立的な児童会活動と校内支援システムの構築

—委員会活動の活性化を通して—

吉田 和夫

(学校運営コース 10502061)

I 研究のねらい

本校（前橋市立朝倉小学校）の学校課題には、特に高学年（5，6年生）において次の3つがあげられる。①与えられたことはするが、自主的に行動する児童が少ない。②学校のきまりや、約束を守って生活することができない児童がいる。③相手の立場に立って考えることができない児童がいる。（学校評価の高学年の課題（H22）より）それらの学校課題を6年生担任（6学年主任）、児童会・委員会担当者として、委員会活動を通して解決していくことを本研究のねらいとした。

本校には9つ委員会（飼育、栽培、保健、放送、図書、給食、美化、体育、本部）がある。本部というのは児童会本部であるが、本校の場合は他の委員会と横並びになっており、児童会活動はこの9つの委員会が中心となっている。各委員会の主な活動は、昨年度まで学校の中で必要とされる当番的な活動が中心であった。教師のリード（主導）で行われ、例年の活動を踏襲しているのである。その当番的な活動は、学校の仕事として重要な活動ではあるが、仕事がおざなりになる場合も見られた。それは、活動内容が発展的で創造的な活動が少ないことや、連続性がなくその場限りのものが多く、そのため自分たちで何かを考えてやろうという意識がもてないからではないかと思われた。そこで本年度は、例年教師のリードで行われ、前年の活動を踏襲している体制を見直すこととした。高学年が活動の中心となる委員会活動で、児童自身が主役になるような場が与えられ、活躍できる場があれば、自己肯定感も高まり課題が解決できる可能性があると考えたのである。

本校では、児童会活動は事実上、委員会活動となっているので、学校課題を解決するには、委員会活動を見直し活性化をはかれば十分なはずである。そこで、本研究の目標を「自立的な児童会活動」の実現とした。すなわち、「児童自身が学校生活について見つめ直し、自分たちで問題を見つけ、よりよい学校生活づくりを目指し、問題を解決していけるようにする。」ことである。それは、また文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』の児童会活動の目標にもある「児童会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。」に通じるものでもある。

II 研究の方法

本研究を始めるにあたって、教師は委員会活動をリードするのではなく、あくまで支援に徹することにし、委員会活動を活性化する方法として、以下のような5つ方法を構想した。

1 6年生が1クラスという利点を生かす。

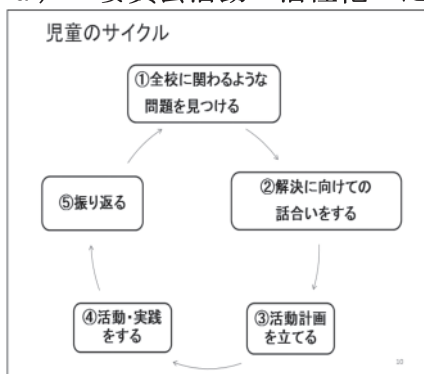
今年度は6年生が1学級しかなく（5年生以下はすべて2学級）、その学級の担任と

なったことは研究のためのよい条件であった。それは、学級内に委員長がすべて揃ったからである。そこで、次の3点を構想した。①「自分たちで朝倉小学校をよくしていこう」という意識を育てる。②各委員会の活動報告を帰りの会等で行い、委員会同士の交流を図る。また、③国語では、「委員会を紹介しよう」、学活では、「委員会活動を見直そう」という単元で授業も活用する。

2 校内支援システムを構築する。

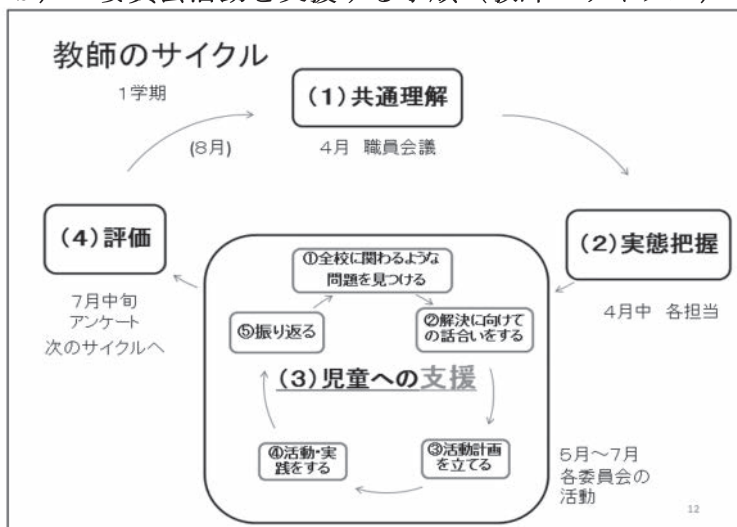
4月の職員会議で、昨年度までの委員会活動を見直し、教師は活動をリードするのではなく支援するというスタンスを取るように、委員会活動の扱いを見直すことのできることを得た。また、委員会活動が連続性を持つように、児童側、教師側にそれぞれ次のような活動サイクルが生まれるように年間計画を立てた。

a) 委員会活動の活性化のための仕組み（児童のサイクル）



児童には、「自分たちで朝倉小学校をよくしていこう」ということをいつも意識させ、その上で、次のような5段階の活動サイクルが生まれるようにした。①全校に関わる問題や、今まで見過ごしてきたこと等を委員会活動の中で取り上げ、②問題を見つけたら、解決に向けて話し合いをし、③活動計画を立て、④活動・実践をし、⑤振り返りをする。そして、次の問題を見つけると、さらに2巡、3巡とサイクルが続くようにした。

b) 委員会活動を支援する手順（教師のサイクル）



教師側のサイクルは、次の(1)から(4)のように構想し、各学期に1巡するようにした。(1)委員会活動全体についての共通理解をもつ。(2)担当委員会の活動内容と児童の実態を把握する。(3)児童への支援を行う。それは、a) 委員会活動の活性化のための仕組み（児童のサイクル）と対応する。児童のサイクルは、教師の側から見れば次のようになる。

①自主的に動けるよう意識づけをして問題の投げかけ、②活動の方向性を導き出し、③活動可能かどうか検討させ、④その活動を通して、児童が自立していけるように支援し、⑤振り返りをさせて、次の問題を見つけさせる。(4)委員会活動を評価し、全職員で共有し、それぞれの委員会の活動を全職員が支援できるように共通理解をはかる。各学期に以上のようなサイクルが成立するようにする。以上の過程で、教師が支援に徹することで児童の自主的・実践的な態度を育てられるはずだと考えた。

3 職員の共通理解の場を設定する。

協力要請は年度初めの職員会議で行い、その際に構想を説明し共通理解をはかる。夏休み前に活動の評価をし、夏休み中の校内研修で各委員会活動の実態を取り上げる。2

学期初めの職員会議で委員会の担当者だけではなく、全職員で支援できるように共通理解をはかって活動を再開する。また、冬休み前にも活動の評価を行って3学期につなげる。

4 委員会の特設の時間の設定する。

委員会活動の充実のためには、活動時間を確保する必要があるため、定例の月1回の委員会の時間の他に、朝と放課後に月1回ずつ特設の時間を設ける。委員会の特設の時間を年間行事予定表の中に位置づける。

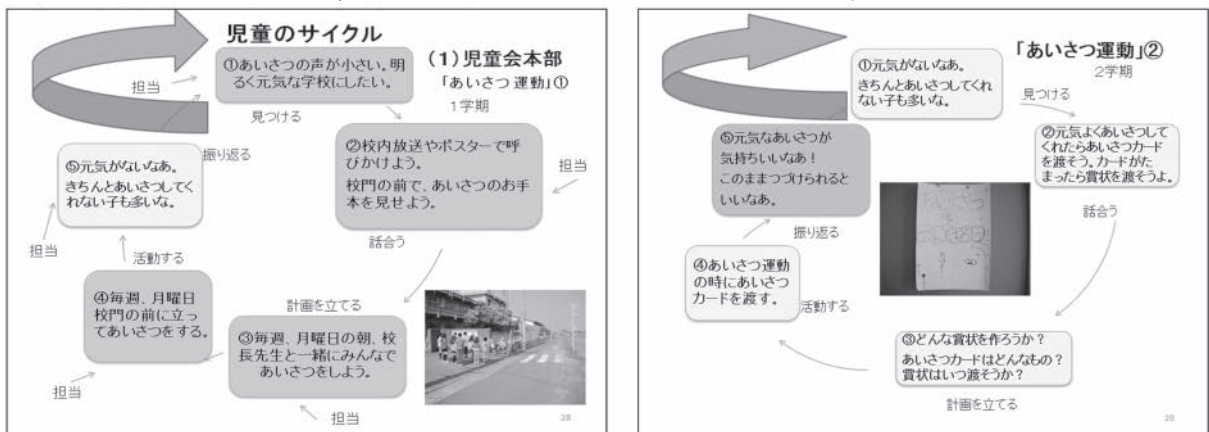
5 委員会活動の情報を共有する。

児童が相互に委員会活動を知り、情報を共有することが活動の活性化には不可欠であるので、児童集会、掲示板、校内放送等で委員会の活動を発表する場を設け、全校に向けてそれぞれの委員会の行っている活動や、委員会からのお知らせ・お願い等、活動内容を広報する。

Ⅲ 実践の展開

以上のような構想にそって委員会活動が進行していった。活動にはいくつものサイクルが現れ、児童会本部と給食委員会では、次のようになっていた。

児童会本部の活動には、次のようなサイクルが生まれていた。

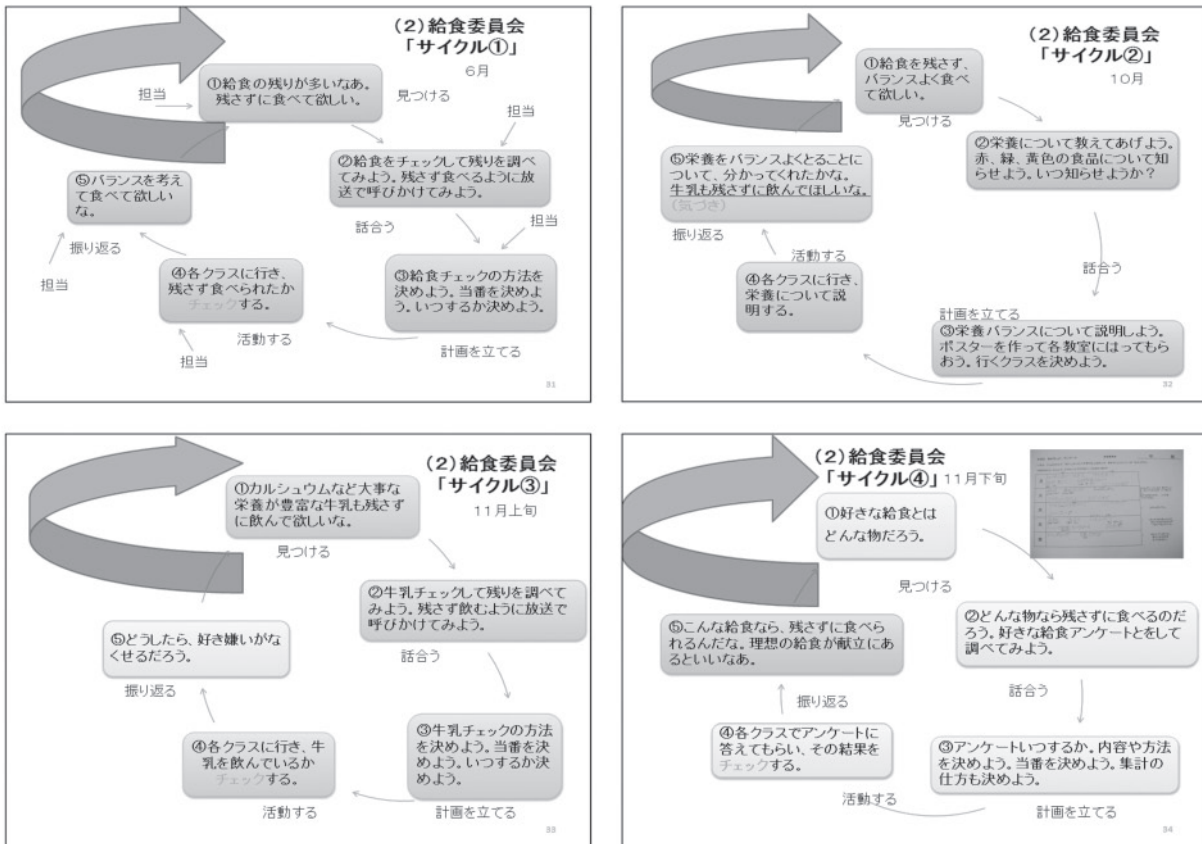


朝倉小をよくするために委員が提案したことは、あいさつに力を入れていこうということであった。そして、スローガン「あいさつ なかよく 協力 みんなの力 朝倉小学校」が作られた。教師の側からもあいさつを話題にしたところ、「(「あいさつ運動①」)、①「見つける」段階で、あいさつの声が小さいことに気づいた。②「話合う」段階では、校内放送やポスターでの呼びかけ、校門であいさつの手本をすることを決めた。③「計画を立てる」段階では、毎週、月曜日の朝、校門のところで「あいさつ運動」をすることを決めた。④「活動する」の段階では、本部委員が大きな声で、率先してあいさつの実践した。⑤「振り返る」段階では、5月から始めて、あいさつはだんだんよくなってきているが、2学期も継続していくという結論となった。そこで、2学期に2巡目のサイクル(「あいさつ運動②」)が生まれた。②「話合う」段階では、活動の工夫を考えた。「積極的に元気よくあいさつしてくれたら、あいさつカードを渡そう。」「カードがたまったら賞状を作って渡そう。」となった。③「計画を立てる」段階では、カード作り、賞状授与の時期を決めた。④「活動する」段階で、カードを渡すというこの活動は児童に評判がよく、元気なあいさつが増えた。賞状を渡したクラスも10クラスにもなった。⑤「振り返る」

段階では、毎週月曜日の活動を終えるごとに、あいさつの様子を振り返った。

児童会本部は、以上のように学期ごとに1つのサイクルを生み出した。活動は、連続性を持ちながら徐々に発展しており、3学期には3巡目のサイクルが生まれつつある。

給食委員会の活動には、次のようなサイクルが生まれた。



給食指導主任である委員会担当者には、「今年は、特に食育について考えていきたい」というねらいがあったことから、児童とスローガン「バランスよく、いっぱい食べる 朝倉の子」を考え出した。そこで、給食委員会は5月の児童集会で常時活動の紹介と「給食を残さず食べてほしい」ということを発表した。しかしその後、給食を残しているクラスがあることに気づき、サイクル①が生まれた。給食チェックをしてみても、振り返った結果、「まだ、給食の残りが多い。バランスを考えて食べて欲しい。」という、新しい問題に気づき、サイクル②が始まった。「栄養の3要素についてまとめて各クラスに教えに行こう」という活動になった。その活動の振り返りで出てきたのが、「牛乳も残さず飲んで欲しい。」ということであった。そこで、サイクル③では、「牛乳チェック」をするための話合いが始まった。牛乳チェックをした結果、チェック期間は牛乳の残りは少ないのだが、今度はおかずの残りが新しい気付きとなった。「どうしたら、好き嫌いをなくせるだろうか。」から、「では、好きな給食とは何だろう。」という疑問につながり、サイクル④で、「好きな給食について調べてみよう。」ということになった。「好きな給食についてアンケートをとって、どんなものなら残さず食べられるのか調べてみよう。」ということをお話合い、いつどのようなアンケートをするか等の計画を立てた。アンケート後、好きな給食のメニューが分かったことから、「こんな給食が出るといいな」「理想の献立を作りたい」と考えがふくらんできた。

この給食委員会の活動は、6月から始まり4巡目のサイクルまで進んでおり、螺旋的に

次の新しい問題を見つけ、次々に発展していく事例であったといえよう。

以上のように、本研究で設定した児童の側のサイクルには、1つの問題からつながりのある新しい問題へと発展していくタイプのサイクルと、児童会の「あいさつ運動」のように1つのことを深く突き詰めながら発展していくサイクルのタイプの2つが表れた。

IV 評価

本研究では、児童、教師、保護者にどのような受け入れられているかをアンケートや教職員の発言から探った。アンケートによれば、①児童に自分たちで考えて実行するなどの気持ちが見られ、②児童が責任を持って活動に取り組む姿も見られ、また③児童にとっては昨年よりも今年の委員会活動が楽しいと感じられていることがうかがわれた。

また、実践検討会の研究協議では、④児童の活動が活性化し、⑤活動に主体性がみられるようになった、という発言があった。また、⑥下級生にとっては透明性が高まって活動しやすくなり、⑦来年度に委員会に入ることを楽しみにする児童の例も紹介された。その一方で⑧下級生が6年生から影響力を受けているのに対して、同学年同士の相互影響は不十分であるとの指摘もあった。また⑨児童の自主性を促す余地はなお大きい、それには指導に当たって教師が支援型のスタンスをもっととることが有効だという指摘もあった。

以上のことから、本研究で行った委員会活動の活性化が、学校課題の解決にかなりの貢献をしていることを示していると言えよう。

V 提言

本研究の成果から、児童会活動の活性化を実現する手だてとして、次の3点を提言したい。①児童への支援体制をつくり、意図的に自主的に活動できる体験過程（児童のサイクル）を設定すること。②児童の活動を支援する教師の仕組み（教師のサイクル）を整えること。③教師はリードすることをやめて支援に徹すること。

本研究は、学校を活性化するためにも児童会活動（委員会活動）を活性化することが有効だということを示している。児童に自主的な活動体験をさせることにより、児童会活動が学校全体の取り組みになっていくことが、本研究の経験である。本研究の進行のもとに、学校の雰囲気が変わり、教師もその活動の支援方法を考えたり、工夫したりすることがみられた。特に、教師のリードから支援へのスタンスの転換が、「自分たちで、朝倉小をよくしていこう」という児童達の行動の指針となり、新しい学校風土につながりつつあるものと感じている。

参考文献

- 文部科学省『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 東洋館出版社 平成20年
山口 満・安井一郎 編著『改訂新版 特別活動と人間形成』 学文社 2010年
相原次男・新富康央・南本長穂 編著 『新しい時代の特別活動 個が生きる集団活動を創造する』 ミネルバ書房 2010年